

近世怪異説話における隠里、仙人と中国道教

KAKUREZATO, RECLUSE AND CHINESE DAOISM
IN TALES OF THE STRANGE AND MARVELOUS
IN THE EARLY MODERN PERIOD

王 建 康*

Kakurezato is that ideal place where one is not easily noticed, i.e. the home of the recluse. It is a motif in the tales of the strange and marvelous in the early modern period and often described as the locus of a story's action. For example, *Kakurezato* by the representative kanazôshi writer Asai Ryôji in *Otogibôko*, "Yumeji no Kazaguruma-Kakurezato" by the representative ukiyozôshi writer Ihara Saikaku in *Shokoku Banashi*. Going even further back one can also offer the seventeenth-century work *Kakurezato*.

How did this idea come to be conceived? What are its origins? In this paper I will compare the special characteristics of the description of *Kakurezato* with the contest of various Chinese accounts of the same. For example, to that in China's oldest novel

*WAN Jan Kang 中華人民共和国、復旦大学日本語文学研究室専任講師。慶応義塾大学文学研究科国文学専攻博士課程。近世文学、比較文学専攻。「坂口安吾の実存的傾向」（国際交流基金編『論文集』第3）、「異質の文学—村上春樹の『羊をめぐる冒険』」（上海社会科学院誌『外国文学與報道』）、「『太平廣記』と近世怪異小説—浅井了意の『伽婢子』の出典関係及び道教的要素」（『藝文研究』64号）などの論文がある。

about a god-like recluse, Liexian zhuan, by the Han dynasty writer, Liu Xiang; to the cave of the recluse as described in shiyiji by Wang Jia, a Daoist of the jin dynasty; and also the Daoist scriptures, Ziyang zhenren zhuan Zhengao, and Tiandigongfutu. I will point out that *Kakurezato* is a motif received from the Chinese Daoist tradition of cave dwelling as an ideal. In addition, by means of a careful examination of *Otogibôko* and *Shokoku Banashi* I would like to examine the reception and transformation of the image of the immortal recluse as it appears in the cave-dwelling ideal of early modern tales of the strange and marvelous.

Finally I would like to consider those passages in the *Nihon Shoki* which have a bearing on the cave-dwelling ideal, the books (use of good editions, manuscript copies) of Asai Ryôï which deal with Chinese popular Daoism, connections with *Honchô Ressenden*, which Ihara Saikaku had published at about the same time as *Shokoku Banashi* and which has a particularly Daoist cast, and illustrations of recluses, as well as the process of transmission to Japan of the Daoist cave-dwelling ideal, its relationship to Ryôï and Saikaku's Daoism, and the interest in Daoism of those for whom these tales of the strange and marvelous were written, the readers of the Edo period.

近世怪異説話にはよく隠れ里に関する描写が見られる。隠れ里とは山の中、地下にある容易に人目には触れない別世界である。近世怪異小説の祖とも言われる仮名草子代表作家浅井了意の作、『伽婢子』(1666)の巻十の一には「隠れ里」という怪異説話がある。次のように隠れ里を描いている。

又五郎(中略)山をめぐり、西をさして行ければ、大なるあなのはたに

してとどまる。(中略) こよひすこし降たるに土すべりて踏はずし、あな
のうちに落入たり。底深く岸たかうして、あがるべきたよりなし。いとど
暗かりければ、ここにて死するより外はなしと、かたはらをさぐりみるに、
よこにあなあり。しずかにあゆみゆくに、一町ばかりにして、明かなる所
に出たれば、月日のひかり常のごとし。ひとつの窟に石の門ありて、数十
人その門をかためて番をつとむ。

また巻九の二「下界の仙境」も同じ隠れ里の話である。

金堀(中略)地のなかに犬のほゆるこゑ、庭鳥のなく音、かすかにひび
きて聞ゆ。(中略)一町ばかり行ければ、にはかにあきらかになり、(中略)
別に天地日月あきらけき一世界なり。(中略)宮殿楼閣、(中略)五色の蝶、
(中略)五色の鳥、(中略)二道の滝ながれ出る。(中略)一町ばかりにし
てひとつの楼門にいたる。上に天桂山宮と云額をかけたなり。(中略)金の
冠を着たる人出ていふやう、大仙玉真君の勅定にはその金堀をつれて遊覧
せしめよとあり。

浮世草子の代表作家井原西鶴が『伽婢子』の影響を受けて書いた小説『西鶴
諸国はなし』(1685)の巻二の五に「夢路の風車-隠れ里」という怪異説話が
載っている。

飛驒の国の奥山に、むかしより隠れ里のありしを、所の人もしらず。有
時、山人の道もなき、草木をわけ入を、奉行見付けて、跡をしたひ行に、
鳥もかよはぬ峰を越、谷あい三里程もすぎて、おそろしき岩穴あり。かの
山人是に入る。のぞけば只くろふして、下には清水の流れ青し。(中略)
四五丁くぐるとおもひしが、唐門、階、五色の玉をまきすて、喜見城のと
は、今こそ見れ、是なるべし。折ふしは冬山を分のぼり、落葉の霜をふみ
てきたりしに、爰の気色ははるなれや。鶯、雲雀の囀りて、生鳥賊・さは
ら賣声、おのづからのどやかに、

さらに遡れば近世初期に刊行された御伽草子『隠れ里』にも隠れ里の風景が
描かれている。

こはたの野へに、出たりけり、(中略)きしかけのところを、みやりたれば、おほきなるあなあり、そのうちにこそ、人のものいふ、こゑこそきこゆれ、(中略)内に入て見はやと、おもふ心つきて、さしあしになりつつ、半町ばかり、行くかとおもへは、さしもひろき所に出たり、日はてんにかかりてくもりなくてらし、河水、しつかになかれて、又ふかからず、是はそも、ひちやうはうか、いひけん、こちうのてんち、けんこんの外なる、国なるへしとおもひ、くかふをみれば、むなかと、からもん、たてならへたり。

同じく御伽草子である『富士の人穴草子』(元和、寛永頃)にも類似する隠れ里の話がある。

いはやへ。入にけり。(中略)五ちやうはかりゆきて、みれは、につほんのこく、月日のひかり、あらわれたり。また二ちやうばかりゆきて、見れば、すこし、まつばらへいてにけり、そのちのいろは、五しきなり、ここにかわあり(中略)二ちやうばかり、うちすぎて見れば、八むねつくりの、からの御所有、ひわだふきにそ、したりける、さて、はしらはは、にしきをもつて、つつみてあり。(中略)きたのはうを、みれは。いけあり。(中略)いけのみずいろ、五しきなり。

以上の説話を見ていると、いわゆる隠れ里には次のような特徴が見られる。山に行く途中、「下界の仙境」には地下に井戸を掘る時)不意に岩穴が見つかり、そこをくぐると、月日があり、綺麗な川、立派な宮殿、楼門あり、素晴らしい別世界が現れる。そこに怪異説話の人物が登場し、怪異のドラマの幕を開く。このような隠れ里の描写は近世怪異小説の常套の手段としてよく見られる。

ところで、こういった隠れ里はどのように成立したのか、ここではその原点を探りたい。

紀元前6年ころ、中国では最古の神仙を描写する怪異小説『列仙伝』が刊行された。作者は劉向という人と伝わる。この中に「邗子」という説話がある。

邗子は(中略)よく犬を放し飼いにしていたが、あるとき犬が山の洞穴に

走り込んだ。邗子がそれについて入り、十余晩も泊まりを重ね、数百里を歩き続けるうち、山の頂上に出た。頂上には宮殿があって、青い松が森々と茂り、仙界の役人が厳重に守っていた。(中略) 四川の人々は洞穴の入口に祠を立てたところ、しばしば音楽や取次の声が聞こえた。西南の地方数千里にわたって人々がみなこれを齋き祀った。

これは中国初めての隠れ里の話であり、洞窟仙境と称される。『列仙伝』は道教の教典『道藏・洞真部伝記』に収録され、道教の有名な著書、晋の葛洪の『神仙伝』(300頃)にも引用された。道教の百科辞典とも言われる北宋の張君房の撰した『雲笈七籤』には「邗子」が『列仙伝』に描かれた七十余人の神仙と共に道教の神様として収録された。従って、ここでは「邗子」という洞窟仙境、即ち隠れ里と道教との関係がまず伺える。『列仙伝』の洞窟仙境描写の影響を受けて、晋の王嘉(?~393頃)が『拾遺記』という小説を書いた。この中の「洞庭山」においては、洞窟仙境がさらに文学的に描かれ、初めて人間と仙女の縁談を記した。

其の山また靈洞あり、中に入りて常に燭が前において有るが如し。中に異香、馥泉あり、泉石明朗なり。藥石を採る人、中に入りて、十里行くが如し。廻然として、天清き、霞耀く。花芳しき柳暗し。丹楼瓊宇、宮觀異常。乃衆女霓裳、氷顔艶質を見て、世人と殊に別なり。来たりて薬を採る人を招き、瓊漿玉液を以て飲ましめ、延べて璇室に入り、簫管糸桐を以て奏す。餞して家に帰らしめ、これ丹醴之訣を贈る。

この洞庭山は道教の仙境の一つである君山の別称であり、「洞庭」とは洞窟の庭=地下にもぐる広場であるのがその語源という。また作者王嘉自身は「不食五穀」「隠於東陽谷、鑿崖穴居」^①即ち洞窟に住み求仙に熱中する道士として名が知られている。

道教の重要人物、梁の陶弘景(452~536)が撰した道書『真誥・稽神枢』における道教の洞窟仙境の一つ句曲洞天についての記述はより具体化された。

洞墟は四郭にして上下はみな石なり。(中略) その内には陰暉夜光、日

精の根ありてこの空内を照らし、明は日月と並ぶ。陰暉は夜を主り、日精は昼を主る。形は日月の円かなるがごとく、玄空の中を飛ぶ。句曲之洞宮五門あり、南の兩便門、東西の便門、北大便門、凡五門に合うなり。虚空の中にはみな石階あり。曲出して以門口を承け、往来上下するを得しむるなり。人の卒行出入するものは、都くこれ洞天の中と覚え、故に自らこれは外の道路と謂うなり。日月の光はすでに異ならず、草木水沢もまた外と別なし。飛鳥横行し、風雲霧鬱として、またこれを疑う所以を知らざるなり。

以上『列仙伝』、『拾遺記』又道書『真誥・稽神枢』の洞窟仙境の描写を近世の怪異説話の隠れ里の描写と比べれば、隠れ里の原型が中国の洞窟仙境であることは明かであろう。

洞窟は道教と極めて密接な関係がある。道教の修行は山の洞窟で行い、人跡未踏の洞には薬草、鉱物があり、長生不死の為の養生の理想的場所である。道教上清派の発祥地である中国江蘇省句容県は地層変化による洞窟の多い山地である。道書には「洞」と関係する言葉が溢れている。道経には三洞（洞真、洞玄、洞神）に分けられている。洞窟で修行する仙人は「洞仙」といい、その洞窟は「洞天」というなど枚挙に暇がない。

魏晋南北朝（220～589）は道教の最盛期であった。この時期には洞窟仙境は既に道教仙境の一大系統となっていた。四世紀の末頃の道教教典である『紫陽真人伝』には仙人の治める三十近くの洞窟仙境である山名が挙げられている。初唐になると、こういった洞窟仙境が洞天福地と称され、十大洞天、三十六洞天、七十二福地に設定され、道教の仙境が完全に整理され、系列化された。^②

道教の洞窟仙境は怪異小説に多大な影響を与えた。魏晋南北朝は『搜神後記』（伝晋陶潜撰）、『異苑』（六朝宋劉敬叔撰）、『幽明録』（六朝宋劉義慶撰）など、そして唐の『遊仙窟』（唐張鷟撰）、さらに清の『聊齋志異』（清蒲松林撰）に至って洞窟仙境が怪異小説の一パターンとして描き継がれた。この中、晋の陶潜の『搜神後記』には洞窟仙境を記述した話は八編もある。さらに彼は道教の洞

窟仙境の内容を変え、洞窟に入り、古代人に会った、時間と空間を超越した
いわゆる桃源郷という理想郷を作りだした。こういった理想郷は『西鶴諸国は
なし』巻一の四「傘の御託宣一穴里」、『伽婢子』巻二の一「十津川の仙境」に
も見られる。ここでは詳しい論述を略す。

道教の洞窟仙境に仙人がいるのは一つの特徴である。洞窟仙境の原型である
『列仙伝』の仙境には「仙吏」即ち役人の仙人がいる。『拾遺記』には仙女が現
れている。『真語・稽神枢』にある句曲山では三茅君という三人の仙人が治め
ている。道教の洞窟仙境、十大洞天と三十六洞天、七十二福地ではそれぞれの
仙人が配属されている、道書『抱朴子』（370頃）によると、仙人には天仙、地
仙、屍解仙の三種類がある。天仙は天界に住み、飛行自在であり、地仙は各諸
洞窟仙境に住み、飛行はできないが、長生不死である。修行を続ければ天仙に
もなれる。屍解仙は普通の人間が長生術により仙境に入った一番下位のもので
ある。長生術とは断穀（米などを食わず）、服餌（薬草を飲む）、調息、導引
（大極拳、気功のようなもの）、房中術（正しいセックス法）である。

つづいて、仙人について前述した近世の隠れ里の話を検討してみよう。『伽
婢子』の「下界の仙境」には「大仙玉真君」が現れ、完全に洞窟仙境の風景を
表している。同書の「隠れ里」には「虚星の精霊として、大黒天神の使者」が
登場する。仙人ではないものの、「五百歳をたもちて」「功をつみ行を満て、天
上にとびかけり、仙境に出入して、自在神通のたのしみにほこる」という彼ら
は長生不死の身で修行を続け、さらに昇天して飛行自在の天仙を求める道教の
地仙の変身と思われる。この話は明の瞿佑『剪燈新話』（1379頃）巻三「申
陽洞記」の翻案であるのは周知のことであるが、ここでは中国の洞窟仙境の怪
異説話は明になって、仙人と出会う従来のパタンが書き継がれる一方、仙人の
代わりに精霊が登場する新たなパタンが現れたことが伺われる。恐らく鼠の精
霊の話は日本の鼠に関係する昔話と共通する点が多く、江戸の読者にとっては
受け入れやすいためこういった話を翻案、創作したのであろう。この点につい
て、鼠が登場する御伽草子の『隠れ里』も同じく考えられる。しかし、この説

話にも「是そも、ひちうほうか、いひけん、こちうのてんち、けんこんの外なる、国なるへしとおもひ」とある。この「ひちうほう（費長房）」は道教の仙人であり、「こちうのてんち（壺中天地）」は方術により洞窟仙境を壺の中に治めたいわば縮小した洞窟仙境である。御伽草子の『隠れ里』が仙人のいる洞窟仙境の受容であることはほぼ間違いないと思う。つづいて『西鶴諸国はなし』の「夢路の風車－隠れ里」の中にある「山人」に注目したい。奉行は「道もなき」「鳥もかよはぬ峰」に現れた「山人」を「見付けて、跡をしたひ」、隠れ里に入ったのである。自然にこの「山人」は仙人に連想される。『説文解字』（120頃）によると、「仙」という字は「仝」とも書き、「人在山上従人従山」である。「山人」即ち「仝」であり、「仙」（人）である。山人はまさに作者の「仙人」の隠喩であろう。このような隠喩は同書巻一の六「雲中の腕押し－長生」にも見られる。「有時奥山に、年をかさねたる法師のきたつて、（中略）其のありさまを見るに、木の葉をつらぬき肩に掛、腰には藤づるをまとひ、黒き白より、眼ひかり、人間とはおもはれず、松の葉むしり、食物として」、また「短斎坊といふ、木食ありし（中略）百余歳になりぬ。」これは明らかに長生術をたよる仙人像である。さらにその「奥山」も隠れ里の隠喩と考えてよいであろう。実は巻二の五「夢路の風車－隠れ里」の前にある巻二の四「残る物とて金の鍋」には西鶴ははっきりとその副題として「仙人」と書いている。主人公木綿買いが山で出会った老人は「鳥のごとく飛び乗りて行くに、一里ばかりも過て松原の陰にて、（中略）ひらりとをり」た。これは間違いなく飛行自在の天仙クラスの仙人像である。副題が「仙人」である話のすぐあとに「隠れ里」の話を設置したのは西鶴の仙人、また仙人と洞窟仙境の関連に対する理解を示したものである。

ところで、近世の怪異説話に隠れ里の話がよく現れているのは中国道教の近世における影響が示唆される。実際には中国道教、また道教の洞窟仙境思想は江戸よりもっと早く日本に伝来されたのである。たとえば、文武元年（697）より先帝を太上天皇と称した。この「太上」とは道教の至高至尊の神に対する

称呼である。この太上天皇の御所又本人は仙洞とも呼ばれる。仙洞のもともとの意味は仙人のいる洞窟仙境である。『和漢三才図会』の「仙洞」の条に並べている「仙院、紫府、丹台、姑射」などの語はどれも道教と関係する言葉である。また民間信仰である群馬県の赤城山信仰も道教とつながっている。この信仰で神の化身とされる「ムカデ」は江南道教の神であり、赤城山の名は道教の洞窟仙境である十大洞天の一つ、赤い洞窟のある赤城山と一致している。^③ 降って、近世における道教の影響が一番大きいのは明末清初、道教の民衆化のために作った勸善懲悪を説く書物—善書の大量伝来である。代表的なものは『太上感應篇』、『迪吉録』、『明心宝鑑』等が挙げられる。これらの書は大量に翻刻、校注、翻訳され、近世の人々の修身の書物として親しまれていた。『伽婢子』の作者である浅井了意は晩年になって『太上感應篇』の注釈を精力的に抄写し、『太上感應篇説定』（1685）を完成したのは彼の道教に対する深い関心を示した。彼の代表的仮名草子作品はいずれも道教の善書と直接関係しているのである。最初の仮名草子作品『堪忍記』（1659）は善書『迪吉録』の内容を多く引用している。寛文元年の『浮世物語』には善書『明心宝鑑』よりの引用が明らかである。『伽婢子』の隠れ里の話である「下界の仙境」は唐の『博異記』（唐馮廊撰）の「陰隠客」を翻案原拠としたが、了意はタイトルを改め、さらに原拠の洞窟仙境の名「梯仙国」を「梯仙皇真宮」に、仙人を「大仙玉真君」に書換え、洞窟仙境の道教色彩を原文よりいっそう濃くしたのはまさに了意の道教洞窟仙境に対する深い理解の上での工夫と見られる。

井原西鶴の場合は、前述のようにその著『西鶴諸国はなし』の中に隠れ里、長生の仙人など道教関係の内容が見られる。そのほか彼と道教とのつながりにはもう一つの手がかりがある。これは『西鶴諸国はなし』より一年遅れて刊行した田中玄順編の『本朝列仙伝』（1686）である。この書の序には、

夫日本は靈地名山をユウして。神明カツテ跡を垂タマヒ。仙客ヒソカニ棲ヲを占ル処ナリ。世モツテ神ノ在スコトラ知テ。仙ノアルコトライマダ知モノスクナシ。（中略）漢土ニハスデニ葛洪ガ神仙伝。及び劉向ガ列仙

伝あり。(中略) 秃筆ニマカセテ。其跡著ヲ彼に採。此ニ拾テ数十人ヲ得タリ。

と記している。なかに洞窟に棲み修行する役小角、久米仙人等の話が多く載せている。道教と関係の深い書物である。注目すべきはこの本の版元は『西鶴諸国はなし』と同じく、池田三郎右衛門であり、またその挿絵は井原西鶴の筆と言われる。ここから、西鶴の道教に対する関心が伺える。『西鶴諸国はなし』の仙人の挿絵と『本朝列仙伝』の仙人像と一致する。これらの挿し絵を『有像列仙伝』(1600、王世貞編。この書は慶安三年から寛政三年まで何回も翻刻された)と比較すると、西鶴の書いた仙人像は『有像列仙伝』にある道教の神である鉄拐李像と赤松子像の混合と見られる。また西鶴の作『近代艶隠者』(1648)、『好色一代女』(1686)、『男色大鑑』(1687)においては、いずれも『遊仙窟』との交渉があると指摘されている。^④『遊仙窟』は完全に道教の洞窟仙境を踏まえた人仙縁談の話であり、『列仙伝』、『拾遺記』と共に「日本国見在書目録」に記録され、日本文学に大きな影響を与えた書物である。かくて西鶴は道教に対する関心があつてこそ、隠れ里のような洞窟仙境の話を創出したのであろう。

御伽草子、『伽婢子』、『西鶴諸国はなし』に現れた隠れ里の話は近世怪異小説における道教の受容の一側面を物語る。近世怪異小説を研究するには道教の影響を考えるべきことが示唆される。

注

- ①『晋書』卷95・列伝第65
- ②司馬承禎『天地宮府図』(『雲笈七籤』卷27洞天福地部)
- ③高橋稔ら『日本史を彩る道教の謎』(日本文芸社、平成3年1月)
- ④吉田幸一「上代詩文並びに西鶴における遊仙窟的要素」

討議要旨

小池正胤氏から「浅井了意と西鶴は出自にも経歴にも異質な面があるから、これを同

列には見ない方がよいだろう。たとえば西鶴の『諸国はなし』の場合は日本の民話の中にある隠里の物語を引いてきている面がある。こういった、民話や説話の系列に道教がどのように入ってきたか、といった視点を導入されるとよいだろう。」という助言がなされた。また、吉田三陸氏から『西遊記』と道教の関係、本田康雄氏から「怪異」という述語についての質問がなされた。発表者は、中国の神仙志怪小説でも必ずしも怖い話しばかりではないという例をあげられた。